

### サントリーホールの響き



中嶋 嶺雄  
(東京外語大教授)

「五十にして天命を知る」というけれど、幼少の頃から習っていたヴァイオリンを、満五十歳になつてから人前で弾く機会がこんなにも増えるとは、思いもしなかつた。拙宅にお客があつたときなど、食後にわが家のホームコンサートを強要することはしばしばだが、聴衆のまえて弾くようになったのは三十年ぶりである。学生時代に私は大学自治会(学生会)の委員長だったが、大学祭に中野公会堂で独奏したときは、折から勤評闘争のさなかだったので、聴衆のなかから「勤評反対」の声がかつたことを想い出す。また、都民交響楽団の一員として日比谷公会堂で弾いたのは、その勤評闘争の全学連オルグで、和歌山へ旅立つ夜のことだった。

その私が昨年は合計五回弾いたけれど、そのうち二回は世界に誇るサントリーホールで、である。昨秋オープンしたばかりの同ホールでもう二度もステージに立ったといえ、出演回数だけはプロの演奏家に匹敵するかもしれない。最初の出演については、『文藝春秋』十二月号のグラビアに出てしまったので、見てくださった方も多いと思うけれど、オープニングシリーズの除の演出者・萩元晴彦氏(テレビマンユニオン会長)から電話がかかってくる、十月十二日のオープニング当日の夜のブログラム「音楽との対話」に広中平祐、三浦雄一郎、桐島洋子の諸氏らとともにゲストで招くから、私は話をするよりもヴァイオリンを独奏してはどうかとのことであつ

た。東京交響楽団のメンバーが伴奏してくれるという。折角の機会なので、レパートリーのなかからやさしい曲を選び、パッサカのブルーを弾いたのだが、なにしろ二千名の聴衆である、あがつて途中で弓がふるえてしまった。私のあとに演奏された江藤俊哉氏が楽屋で曰く、「私よりうまく弾かないでくださいよ」と。これは痛烈なジョークであつた。二度目は、去る十二月七日。鈴木鎮一先生の米寿を記念するコンサートに出演した。この日は、終戦直後の松本で、鈴木先生に直接指導を受けた松本音楽院第一期生八名が、エックレスのヴァイオリン・ソナタ(ト短調)第一楽章と第二楽章を弾いた。ブルーに比べれば、こちらの方はずっと難しい曲だけれ



ど、合奏なので気が楽であり、弾きながら天に吸い込まれるようなサントリーホールの透明な音響を満喫することができた。それよりも何よりも大変楽しかった。一緒に弾いたメンバーは、私よりも年下の四十代だが、いずれも才能教育の優等生で、大変上手な方たちばかりである。ピアノは、私たちが子供の頃にいつも伴奏をしていたたいた、鈴木先生の義妹で七十五歳の鈴木静子先生が特別出演してくださつた。これらの人々と合奏するなどは、実に四十年ぶりのことである。

その日は、みなそれぞれの人生経路をたどりつつある幼時の仲間が久々に会し、出演前にごく簡単なリハーサルをおこなつただけだったが、そこは、鈴木メソッドのお蔭で、全員楽譜なしなのにボウイング(運弓)もきれいに揃つていたようだ。鈴木鎮一先生も大変喜んでくださった。

私は、この日の仲間のなかではやや年長だったために、子供の頃のことをよく憶えている。鈴木先生の姪でもある石川裕子さんは、当時から可愛いアイドルで、桐朋を出てからもヴァイオリンの指導者として欠かせない存在であり、カーター前米大統領の来日時には、同伴した令嬢エミリーちゃんとのレッスンをした先生でもある。正岡祐子さんは、大変な勉強家で上達がはやく、数年前まではベルリン・ラジオ交響楽団やロツテルダム・フィルハーモニーで弾いていた。現在は二、三歳児のレッスンに意欲を燃やす指導者である。

赤堀泰江さんも桐朋を出てからずっと日本フィルで活躍しており、最年少の末広悦子さんも四日市で指導者として頑張っている。男性の方では、当日ハイライトを浴びた高久滋夫君はCM関係の本職のかたわら藤沢市民交響楽団のコンサートマスター兼藤沢ジュニ

アオーケストラの団長さんで、今年はジュニアを連れて中国へ演奏旅行に行くとはりきっている。読売日響などで弾いていた村上豊君は腕白少年だったけれど、才能教育の理論家として将来が期待される逸材である。東大オーケストラのコンサートマスターも務めた給田英哉君は現在エリート商社マンとして活躍中で、ピアノの上手な私の大学の事務局長・光田明正氏は、彼のヴァイオリンが国際交流にいかに関与しているかをかねてから推賞していた。

その夜はたまたま都内のホテルで私のゼミ(国際関係論、中国ナジア地城研究)の卒業生諸君が私の勤続二十年を祝う会を開いてくれ、家族連れで大勢集まってくれた。私はここでもヴァイオリンを弾いたのだが、教えた子の暖かい心づかいにもかわからず、サントリーホールのような響きがなかったのは、いささか残念であつた。